

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00301

研究課題名(和文)水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on the annotation and compilation of regional geography in Mito school

研究代表者

橋本 雅之 (HASHIMOTO, Masayuki)

皇學館大学・現代日本社会学部・教授

研究者番号：70164796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究がめざした風土記受容史と水戸学との関わりについて、三年間の共同研究を通して一定の成果を挙げたと評して差し支えないだろう。その成果を具体的に挙げると、(1)江戸時代の文化文政期以後に水戸藩で編纂された地誌において『常陸国風土記』が活用されていた実態が明らかになった。(2)天保10年に刊行された版本『訂正常陸国風土記』の編纂過程において、水戸学の二大派閥であった立原派と藤田派それぞれの学者が深く関与していることが明らかとなった。本研究は基礎的問題を確認した段階ではあるが、風土記受容史の研究のみならず、水戸学研究に対しても新しい研究の可能性を示し得たと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は以下の点にある。(1)これまでの風土記研究と水戸学研究では、相互の関係に着目して調査・研究をおこなったものは見当たらず、本研究が初めての試みであること。(2)水戸藩において『常陸国風土記』は自藩が古代にまでさかのぼる歴史を有することを証明する資料だと認識されていたことが明らかになった。(3)その認識は、新しい国家の確立を目指していた水戸学にとって、歴史的・制度史的な観点からの理論的支柱となり得るものであったことを具体的な形で考証した。以上の研究成果は、幕末の歴史に関心が深い日本国民に対して、地誌という観点から歴史を考えるという新たな材料を提供することを可能にした。

研究成果の概要(英文)：This study on the relationship between Fudoki and the Mito school has produced meaningful results through three years of joint research. First, it became clear that "Hitachi no kuni Fudoki" was used in the regional geography compiled by the Mito domain in the late Edo period. The most important use of the book was to introduce the myths and legends of Mito, thereby proving that the history of Mito dates back to at least the 7th century. This fact proves that "Hitachi no kuni Fudoki" is a significant source for the historiography and geography of the Mito domain. Second, it became clear that in the process of producing "Teisei hitachi no kuni Fudoki", published in 1839, scholars of Tachihara and Fujita factions, the two factions of the Mito school, were deeply involved in the book published. The most important reason why the scholars of the Mito school valued "Hitachi no kuni Fudoki" is that its materials contain many descriptions of the state system that they considered ideal.

研究分野：国文学

キーワード：国文学 風土記 地誌 日本思想史 水戸学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初は、近世後期における風土記の受容と水戸学の形成の間に深い関係があるという認識はなかった。従って風土記受容史研究と近世思想史研究とが協同してこの問題に取り組む必要性も認められておらず、先行研究も存在しないのが実情であった。本研究は、このような状況を背景として構想されたものであり、このような視点からの協同研究は今後の風土記研究にとっても水戸学研究にとっても意味があると言える。

2. 研究の目的

上記のような研究開始当初の状況を踏まえて、本研究は奈良時代に編纂された『常陸国風土記』が、おもに文化文政期以降に水戸藩で編纂された複数の地誌の中にどのように取り入れられているのかという実態を明らかにし、そこから地誌としての『常陸国風土記』が幕末における尊王攘夷思想の理論的支柱となった水戸学の形成にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的として構想された。言い換えるならば、本研究は『常陸国風土記』が水戸藩においてどのように受容されたのかという問題、および水戸学における地誌史料編纂の思想的背景とその意義について、地誌を切り口としてみた水戸学の生成と発展を考察することを目的とするものであると言える。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究は文献学的な視点から『常陸国風土記』が江戸時代の地誌にどのような形で利用されているのか、さらに水戸学の側からそれがどのように解釈されているのかという実態を具体的に跡付ける実証的方法に基づいて研究を進めた。具体的には、地誌に引用された『常陸国風土記』のデータベースを作成し、それに基づいて引用の傾向を分析して水戸学との関係を具体化した。

4. 研究成果

上記の研究方法に基づいてなされた研究の主要な成果は以下の通りである。

(1) 研究論文

研究代表者 橋本雅之

「常陸国風土記の注釈と水戸学」(『上代文学』第121号、平成30年11月)

「水戸学と古風土記の書写」(『風土記研究』第41号、平成31年3月)

「水戸藩における地誌の編纂と常陸国風土記」(『国語と国文学』第97巻10号、令和2年10月)

「会沢正志斎「新論」と『訂正 常陸国風土記』序文 底流としての水戸学

(『研究報告書 水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究』所収、令和3年3月)

研究分担者 兼岡理恵

「栗田寛の風土記研究」(『研究報告書 水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究』所収、令和3年3月)

研究分担者 板東洋介

「水戸藩郡制改革と『常陸国風土記』研究」(『研究報告書 水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究』所収、令和3年3月)

(2) 最終年度研究報告シンポジウム

令和二年十一月十四日(午後1時30分~午後5時) 皇學館大学9号館大会議室
基調講演(招待)

金城学院大学教授 桐原健真氏「好古と考古：水戸学の思想史的意味」

研究報告

橋本雅之「会沢正志斎「新論」と『訂正 常陸国風土記』序文 底流としての水戸学」

兼岡理恵「栗田寛の風土記研究」

板東洋介「水戸藩郡制改革と『常陸国風土記』研究」

パネルディスカッション

司会 中山郁（皇學館大学教授）

パネラー 桐原健真・橋本雅之・兼岡理恵・板東洋介

（3）最終報告書

『研究報告書 水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究』（令和3年3月）上記の最終年度シンポジウム概要をまとめたもの。100冊作成

（4）本研究の概要

本研究によって明らかになったことは以下のようにまとめられる。第一点は、『訂正常陸国風土記』の序文がもつ意味である。研究代表者の橋本および研究分担者の板東洋介の二人は、後期水戸学の二つの流れに属する小宮山楓軒と会沢正志斎の二人が並んで寄せた序文の内容に大きな落差があることに着目した。板東は、二人が寄せた序文の背景に、水戸藩の郡制改革に対する立原派と藤田派の考え方の違いがあったことを多くの資料を提示して読み取り、それが藩政に対する基本的な考え方 封建制と郡県制 の違いに由来する、それは水戸学の根幹に関わる対立に根ざすものであることを指摘した。具体的には、寛政改革を支持した小宮山楓軒がめざした、封建制を根底においた十一郡制と、天保改革で藤田東湖や会沢正志斎が進言した中央集権的な郡県制への改革、小宮山楓軒が目ざした改革が藤田派の改革によって頓挫した敗北感と、幕末の尊皇攘夷思想の中心人物である会沢正志斎の自信が、それぞれの序文に深く刻み込まれているとして、『訂正常陸国風土記』の二人の序文が「近世的な改革構想と近代的なそれとの思想的対立と、前者から後者への移行を端的に示す、思想史・制度史上の記念碑的なテキストだった」と述べた。これは、これまでの研究では見過ごされてきた『訂正常陸国風土記』の思想史研究上の資料的価値を認めたものであり、そこに大きな意義がある。

研究代表者の橋本雅之は、会沢正志斎が寄せた序文と彼の著書『新論』に見られる国家制度に関する記述に着目し、会沢が『常陸国風土記』を古代の国家制度の具体的なあり方と水戸藩の歴史を知ることができる資料として評価していた可能性が高いことを論じた。そのような観点から近世後期の水戸藩における『常陸国風土記』受容という問題を見直してみると、その底流に水戸学の側からの風土記の再発見あったことが浮かび上がってくる。このような、風土記の受容と水戸学の結びつきは、これまで風土記研究の側からも思想史研究の側からも注目されてこなかった問題であり、このような視点は新たな研究のフィールドを切り開くものと言えるだろう。

研究分担者の兼岡理恵は、幕末以後の水戸における『常陸国風土記』受容について、水戸学の流れをくむ国学者である栗田寛がどのような姿勢で風土記の研究を進めていたかという問題を取り上げた。風土記については、秋本吉郎が「上古史研究のための有力な副資料」（秋本吉郎『風土記の研究』ミネルヴァ書房 一九六三 一〇六八頁）と論じ、これが長く風土記研究における共通認識であったが、兼岡は栗田寛の風土記研究を丹念に分析して、秋本の論が一面的な見方であったことを明らかにした。兼岡は、栗田寛の風土記への関心の高さは、十五歳の頃に始まり、奈良時代の風土記に対して自覚的に「古風土記」という呼称を用いた先駆者であることに注目し、幕末の水戸において風土記が単なる副資料として評価されていた訳ではないことを明らかにした。

付記 この「本研究の概要」は、『研究報告書 水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究』（令和3年3月）の中で、橋本が記述した「シンポジウムの総括と期間内に達成した研究成果」に基づいてまとめたものであり、この項目の文責は研究代表者橋本雅之である）

（5）水戸藩の地誌における『常陸国風土記』引用の概要

「茨城県関係近世地誌目録」（『茨城県史料 近世地誌編』所収、1968年3月）によると、江戸時代に水戸藩において編纂された地誌は主な資料だけで51編に上る。その中で、現時点の調査で『常陸国風土記』の引用が確認されるのは次に挙げた5つの資料である。

小宅生順（1638～1674）編『古今類聚常陸国誌』（中山信名写、静嘉堂文庫所蔵本）

長久保赤水（1717～1801）編『常陸考』（赤水自筆本、静嘉堂文庫所蔵本）

小宮山楓軒（1764～1840）編『水府志料』（楓軒自筆本、国会図書館所蔵本）

中山信名（1787～1836）『常陸国誌』（中山信名自筆、静嘉堂文庫所蔵本）

北条時鄰（1802～1877）編『鹿嶋志』（版本、静嘉堂文庫所蔵本）

このうち『水府志料』については、研究代表者の橋本が「水戸藩における地誌の編纂と常陸国風土記」（『国語と国文学』第97巻10号、令和2年10月）において詳細に考証した。また『常陸国誌』に付された「常陸国風土記」写本については、同じく橋本が令和3年5月23日にオンラインで開催された上代文学会大会において口頭研究発表をおこなった。そこで、ここでは小宅生順編『古今類聚常陸国誌』、長久保赤水編『常陸考』、北条時鄰著『鹿嶋志』の三種類の地誌における『常陸国風土記』利用の概要を述べる。詳細については別稿において考察する予定である。

（ア）『古今類聚常陸国誌』

この資料は、寛文年間に小宅生順が編纂した「常陸国風土記」（奈良時代の風土記ではない）と思われる。この資料の中には『常陸国風土記』の引用が三十一例確認できるが、恣意的な改変を含んだ引用がいくつか見られる。このような引用態度は、近世前期における『常陸国風土記』に対する認識をよく示していると思われ、この段階ではまだ古代の水戸を考える上での資料的価値が十分に理解されていなかったと思われる。

参考文献 『茨城県史料 近世地誌編』解題 瀬谷義彦執筆。

（イ）『常陸考』（長久保赤水編）

この資料は、水戸藩の地理学者であった長久保赤水が編纂した地誌であり、現存本は静嘉堂文庫が所蔵する自筆写本一本のみである。江戸時代中期の水戸の地誌として注目すべき資料であり、『常陸国風土記』の引用が20例確認できる（うち名称のみの2例を含む）。おおむね忠実な引用を心がけていることが認められる。長久保赤水の門下生に立原翠軒があり、小宮山楓軒は立原の弟子である。小宮山楓軒が編纂した『水府志料』における『常陸国風土記』の利用は、長久保赤水の『常陸考』に範を得た部分があるのではないかと思われるが、この点については今後の研究課題である。

（ウ）『鹿嶋志』（北条時鄰編）解説（橋本の調査に基づく）

この資料は、北条時鄰が著し、文政六年（一八二三年）に刊行された版本である。袋綴の二冊本で、鹿嶋神宮の由来・祭礼・撰社などを記し、さらに多くの図絵を含んでい

る。静嘉堂文庫所蔵本には、外題に「鹿嶋志」とあるが、見開きには「北條時鄰著 鹿嶋名所図絵」とあり、鹿嶋神宮を中心としたこの地方の名所旧跡を紹介した内容となっている。この資料に寄せた小山田与清の序文によれば、著者の北條時鄰は鹿嶋神宮の神官であったことが分かる。『常陸国風土記』の引用は20例である。『水府志料』と同じく本文を忠実に引用し、また訓読を施しているところに特徴がある。この資料に見られる訓読は現在確認できる範囲でいうなら『常陸国風土記』訓読の最も古い資料であり、この風土記の訓読史を考える上で重要な資料である。(文責 橋本)

(6) 橋本雅之成果論文 「水戸藩における地誌の編纂と常陸国風土記」要旨

(『国語と国文学』第97巻10号、令和2年10月所収)

江戸時代の文化文政期になると、水戸藩では地誌の編纂が活発になった。その中には奈良時代に成立した『常陸国風土記』の記事を引用したり参考にしたりしているものが、存在している。それらの地誌は、『常陸国風土記』の受容史を考える上で重要な資料であるにも関わらず、これまでの研究ではほとんど顧みられることがなかった。本論文では、受容史研究の視点から、地誌における『常陸国風土記』引用の実態を解明することを中心に考察することを目的とする。ところでそれらの地誌に引用されて解釈を施したもののいくつかは、天保期に成立した西野宣明校注の『訂正常陸国風土記』において、頭注の形で受け継がれており、この版本の成立を考える上でも見過ごすことができない。さらにそれは、水戸学の形成過程において地誌が一定の役割を果たしていたのではないかという問題にもつながっていくように考えられる。本論は、風土記の受容史のみならず、そのような水戸学と地誌の関係を視野に入れて、幕末期における水戸藩の思想形成の一端を明らかにすることを射程に収めたものである。

具体的な考察においては、小宮山楓軒がまとめた地誌『水府志料』を取り上げる。調査にあたっては、『水府志料』の基礎資料である小宮山楓軒自筆本(国立国会図書館所蔵、現在デジタル公開されている)を利用し、そこに引用された『常陸国風土記』の実態を明らかにし、それが『訂正常陸国風土記』にどのように受け継がれているかを跡付けて、風土記受容史の具体的展開を明らかにした。本稿での調査と分析の結果、以下のことが判明した。

- 一、『水府志料』は、早くて文化四年(一八〇七)遅くとも天保二年(一八三一年)に成立し、「西野版本」刊行以前にまとまった形で『常陸』を引用した地誌である。
- 二、『水府志料』における『常陸』の引用態度は、地理考証を主とし、古代の文献にその根拠を求めるところに特色がある。
- 三、西野宣明が天保十年に刊行した『訂正常陸国風土記』の頭注には、『水府志料』の地理考証に依拠したと考えられるものが、少なくとも二例存在する。

(7) まとめ

本研究の成果を総括すると、水戸藩における『常陸国風土記』の受容について、文化文政期の同藩での地誌編纂と深い関わりがあることが明確になった。しかもそれを推し進めたのが、小宮山楓軒や会沢正志斎などの水戸学の人々であったことが明らかとなり、本研究の所期の目的を果たしたと言えるだろう。本研究によって、今後の風土記受容史のみならず、水戸藩の地誌編纂、さらには水戸学研究に対しても新しい研究の可能性を示すことができた
と考える。
(文責 橋本)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 兼岡理恵	4. 巻 39冊
2. 論文標題 芳賀矢一と風土記 一九世紀末～二〇世紀初頭の文学研究をめぐる諸相	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論集上代文学	6. 最初と最後の頁 101 120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本雅之	4. 巻 121号
2. 論文標題 常陸国風土記の注釈と水戸学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 1 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本雅之	4. 巻 41号
2. 論文標題 水戸学と古風土記の書写	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 風土記研究	6. 最初と最後の頁 1 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本雅之	4. 巻 97巻10号
2. 論文標題 水戸藩における地誌の編纂と常陸国風土記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 17 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 橋本雅之
2. 発表標題 常陸国風土記の注釈と水戸学
3. 学会等名 上代文学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本雅之
2. 発表標題 水戸学と古風土記の書写
3. 学会等名 風土記研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 松田浩・兼岡理恵他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 古典文学の常識を疑う ー縦・横・斜めから書きかえる文学史	

1. 著者名 橋本雅之、兼岡理恵、板東洋介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 磯野印刷	5. 総ページ数 25
3. 書名 研究報告書「水戸学における地誌の注釈と編纂をめぐる基礎的研究」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	兼岡 理恵 (KANEOKA Rie) (70453735)	千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授 (12501)	
研究分担者	板東 洋介 (BANDO Yosuke) (90761205)	皇學館大学・文学部・准教授 (34101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関